

文学（前近代） Literature (Pre-Modern)

加藤 昌嘉 まさよし

キーワード…文学、和歌、漢詩文、物語、説話、日記、注釈、絵巻、文法、性愛、男色、自然観、美意識、文学観

私の担当範囲は、日本の古典文学（奈良時代～江戸時代）です。古典を扱った概説書・研究書のうち、学部生・院生が読んで「目からウロコが落ちた!」「脳ミソが揺さぶられた!」と思えるような本を選んでみました。なお、1～10は、柔らかめ（軽め）のものから固め（重め）のものへ、という順になっています。

1 出雲路修『古文表現法講義』（岩波書店、二〇〇三）

「平安時代の物語を作ってみよう」というコンセプトで行われた講義を基にした本です。帯（腰巻）には、「君はどう作るか めざせ紫式部!」とあります。「ことば、うた、ものがたり——」「作ってみることからはじめる実践的な古典入門」ともあります。古文を

書いてみることで平安時代の言語表現の本質に迫らんとした、実験的な本です。『古典って面白い!』と心から思える、魅力的な本です。

「一 つひにゆく道——物語のかたち」では、物語の閉じめ（結末）について考察されます。『伊勢物語』『大和物語』など、主人公の「辞世の歌」に収斂してゆく物語が取り上げられます。むしろ、『辞世の歌』を種にして物語が創造されたのではないかと見えるところが、肝だと思いました。

「四 かきつばたといふ五文字を——物語のしかけ1」では、『隠し言葉』が分析されます。折句や杓冠など、判じ物のような和歌が、見事に解きほぐされてゆきます。

「七 ゆきのふるらむ——物語のしかけ2」では、平安文学を、

その下に透けて見える漢詩文と共に読み解いてゆきます。『文選』『玉台新詠』や李白の詩を重ねてみることで、『伊勢物語』の新たな相貌が立ち現れます。

本書のコンセプトは、「平安文学を参考にして物語を作ってみよう」というもので、随所で、学生たちが創作したステキな歌物語が紹介されています。私も、響みに倣い、大学の講義で、「杳冠の和歌を作ってみよう」「枕草子類聚章段を書いてみよう」という課題を出したことがあります。刺激的で楽しい授業になりました。

ただし、本書の魅力は、物語創作よりも、出雲路修の語りの巧さにこそあります。『古今和歌六帖』や『風葉和歌集』の面白さを説き、『毛伝鄭箋』がサラリと参照され、宮沢賢治や坂口安吾の小説を利用し、吉川幸次郎や阪倉篤義の諸説に目配りしながら、話は縦横に広がってゆきます。「平安文学はどのように書かれているか？」という一点に錨を下ろさんとする、さまざまな文学・研究が、芋蔓式に集まって来るのですね。

付記1…本書を、岩波現代文庫から復刊していただけないでしょうか？

付記2…出雲路修は、本書刊行の直後、PR誌『図書』（岩波書店、二〇〇四年三月）に、「擬古文を書く」という文章を載せました。「現代文を古語訳してみる」「擬古文を書いてみる」というエッセイなのですが、一読三嘆です。

2 玉上琢弥『物語文学』（塙書房、一九六〇）

「平安文学はどのように生成したか？」という問題に肉迫する概説書です。平安時代の物語や和歌が、どれほど流動的でどれほど変幻自在であったか、わかりやすく解説されています。なお、本書は、片桐洋一の全面協力によって成ったものだそうです。

「一 物語の誕生——竹取物語」のキーワードは、「動く本文」です。平安時代の物語作者・物語読者は、自由に話を増やしたり減らしたりしていた、というわけです。

「二 物語の現実化——落窪物語」では、『交野の少将』の主人公が『落窪物語』に登場する、という事象が紹介されています。まさに「コラボ」。

「四 長篇物語の生成——宇津保物語」では、短篇物語の合流について考察されます。二つ三つの別々の短篇だったものが、主人公が乗り入れ合うことで、『うつほ物語』という集合体になった、と言います。ここでのキーフレーズは、「原生動物のように四方に触手をのびし、どこが中心だかわからない、どこへでもものび得る」です。ドゥルーズ&ガタリの「リゾーム」みたい。

「五 「歌語り」をめぐる——後撰和歌集」と「六 屏風歌と歌物語——大和物語」では、和歌を核として物語が発展する例や、屏

風に描かれた画中の人物を見て和歌を創作する例が挙げられ、「七私家集と歌物語——伊勢物語」では、和歌に物語が付加される例や、歌集中の和歌が物語に取り込まれる例が挙げられています。

“和歌から物語が生まれる”のですね。“絵から物語が生まれる”のですね。“歌集から物語が発生する”のですね。すべてが新鮮です。現代人の頭にある「文学」の概念が、ネロネロと融解してゆくような気がします。

現代のアニメやゲームの世界では、「コラボ」とか「シェアワールド」とか「エピソードゼロ」とか「スピノフ」とかいっつたものが、多く見られます。本書を読むと、それ以上の試みが、平安文学では自由に活発に行われていたのだとわかります。本書は、二十一世紀の今、ようやく理解され得る存在になった、と言えるでしょう。付記：本書は長らく絶版となっています。復刊していただけないでしょうか？

3 渡辺秀夫『詩歌の森——日本語のイメージ』

（大修館書店、一九九五）

日本の和歌と中国の漢詩文との関連性を考究した概説書です。自然や風景のイメージ辞典でもあります。自然観がどのように醸成されたか、美意識がどのように変容したかが、多くの歌集・詩集・類書を引きつつ解き明かされています。

例えば、「V 移ろひと永遠」。「菊」は、「徳の高い君子」や「錦」や「星」に喩えられることもあったと言います。「菊」は、『萬葉集』には一例もなく、中国の影響を受けて、平安時代以降、定着します。中国で「黄菊」が好まれた一方、日本では「白菊」が、特に「紫」に変色してゆく「残菊」が好まれたというところが、ステキです。

例えば、「Ⅲ 彼方からの訪ない」。「雲」は、神意の兆候であり、瑞祥を表し、あるいは地上界と天上界を繋ぐ働きをし、故人や恋人の面影を重ねるよすがともなつたと言います。『日本書紀』『萬葉集』『史記』『古今和歌集』『続浦島子伝記』『田氏家集』『性霊集』『源氏物語』『新古今和歌集』などなど、博引旁証です。

その他、「ほととぎす……恋情の発露」、「塵……愛する人の不在」、「星……星のタブー」など、意外なイメージに驚かされます。中国と日本を鳥瞰し、奈良時代から室町時代までを往還し、そうして、現代人の思いも及ばぬ自然観や美意識、比喻や象徴が、次々と闡明されてゆくのです。どのページも学ぶところ多く、どのページも美しい詩歌で溢れていて、カフェで開くと何時間も読み耽つてしまう本です。

本書の中で特に有難いのは、巻末の「引用書名一覧」です。日本の歌集・詩集・古辞書、中国の詩集・類書など約二百作が、解説付きで並んでいます。私は、院生の頃、用例を捜すとき、この「引用

書名一覧」を道しるべにしてみました。多謝感謝。

付記…本書を、ちくま学芸文庫か講談社学術文庫か角川ソフィア文庫あたりから復刊していただけないでしょうか？

4 神田龍身『物語文学、その解体——『源氏物語』『宇治十帖』以降』(有精堂出版、一九九二)

平安く鎌倉時代の作り物語、約二十作を読み解いてゆく評論書です。『源氏物語』『浜松中納言物語』『石清水物語』『浅茅が露』『木幡の時雨』などの「性」や「家」に着目し、切れ味鋭く構造分析してゆく、テキスト論的な物語研究です。

『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』など『源氏物語』以降の(やや奇矯な)物語が、総合的に研究されるようになったのは、一九八〇〜九〇年代のことです(三谷榮一編『体系物語文学史』全五巻[有精堂出版、一九八二—一九八三]や市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』全七巻十別巻[笠間書院、一九八八—一九九二]のおかげ)。そんな中、神田龍身は、ほとんど手つかずだった物語たちを、横断的に読み解いて見せました。

「I章 分身、差異への欲望」は、『源氏物語』宇治十帖を論じたもの。薫と匂宮という男主人公二人に、ある種の「男色」関係を読み取ったところは、卓見です。一九九〇年代以降、夏目漱石『こ

ろ』論で、男主人公二人の間に同性愛関係を読み取る論が増えたことと、踵きびすを接しているでしょうか。

「II章 男色、暴力排除の世代交替」は、『石清水物語』『いはでしのぶ』『風に紅葉』を論じたもの。一人の女を争う男二人が、一方で男色関係を結んでいる点が不思議であるわけですが、それを、「起こるかもしれない暴力現象をあらかじめ排除するための男色」と捉えたところには、瞠目どうもくしました。見事な作劇法分析だと思えます。

その他、「III章 分身、交換の論理」では、二組のカップルと二組の双子が相手を交換し合う『木幡の時雨』が解説され、また、「V章 転生と形代」では、輪廻りんね転生が繰り返される『浜松中納言物語』が解説されます。その分析方法は、泉鏡花や三島由紀夫の小説にも適用可能ではないかと思われて、胸躍ります。

凡百のテキスト論と異なり、本書は、「言われてみればそう書いてある」「確かにそういう仕組みになっている」と首肯せざるを得ない指摘で溢れています。のみならず、『風に紅葉』つという物語、読んでみたい」とか「もう一回、『浜松中納言物語』を読み直してみなくちゃ」と思わされてしまうところが、本書の不思議な魔力です。

付記…「性愛」「男色」の問題を、さらに深く知りたいという方には、以下の本を推薦したいと思います。前者は、鎌倉く室町時代を中心とし、後者は、江戸時代を中心としています。どちらも、刺激的で面白い。

田中貴子『性愛の日本中世』（洋泉社、一九九七）ちくま学芸文庫、二〇〇四）
板坂則子『江戸時代恋愛事情——若衆の恋、町娘の恋』（朝日新聞出版、二〇一七）
セックス、ジェンダー、LGBTを研究すると、文学・芸能・絵画・政治・宗教、すべてを相手取ることが出来るのですね。まさに学際。

5 西郷信綱『古事記注釈』全八冊
（ちくま学芸文庫、二〇〇五～二〇〇六）

原本は、全四冊（平凡社、一九七五～一九八九）。文庫化に際して加筆修正されているそうです。

『古事記』の注釈書です。『古事記』の原文、訓読文、語釈、補考から成ります。語学的考証を行い、民俗学的・文化人類学的考察を行い、その思考過程を読者に開示しつつ、古代伝承の奥深さを感じさせ、文学研究の醍醐味をも感得させてくれる、驚異的な全訳本だと思います。

例えば、第六巻のヤマトタケル英雄譚を拾い読みしてみましようか。「子を恐れる父」「草なぎの剣」「月の障りの歌」「記紀歌謡」「死者儀礼」など、さまざまな視点から、この挿話の謎や面白さを立体的に解説していて、ワクワクします。

古典の注釈書というのは、とにかく、無個人的で断定的な説明をしがちですが、本書は、そうではありません。西郷信綱は、注釈は

どうあるべきか？”という問題を熟慮した上で、読者に語りかけようとしているからでしょう。

第一巻の冒頭「古事記を読む——〈読む〉ということについて」と、第八巻の末尾「〈解釈〉についての覚え書き」を読んでもみましょう。西郷信綱は、「〈読む〉とはどういうことか」「〈解釈〉とは何か」と執拗に問い、「原典に忠実な読み」があり得るのかと摸索し、本居宣長や津田左右吉（そうきち）を批判し乗り越えようとしています。『古典を読むこと』の意味と方法を根本から考えようとしているところは、ルイ・アルチュセール『資本論を読む』の「序文」を髣髴（ほうふつ）とさせます。

西郷信綱は、作品の一言一句に寄り添い、その時代に降りてゆき、そうして、『古事記』とそれが孕み持つ宇宙とを、私たちに見せてくれました。皮肉なことに（本人には聞かせたくないのですが）、本書を読むと、『古事記』って面白い”と思うと同時に「西郷信綱って面白い」と思ってしまうのです。

教訓…注釈者とは、幽邃（ゆうすい）な森へのツアーコンダクターなのだ（ただし、森が良かったのか、コンダクターが良かったのかは、区別できない）。

6 久保田淳『中世文学の時空』（若草書房、一九九八）

和歌も連歌も、絵巻も説話集も仏書も、軍記物語も作り物語も日記も随筆も、『中世という宇宙』にあるものすべてを整理して論じたような本です。これを博覧強記。

学生向けの必読書として久保田淳の本を挙げるなら、『西行山家集入門』（有斐閣新書、一九七八）か『藤原定家』（集英社、一九八四・ちくま学芸文庫、一九九四）か、『花のものの言う——四季のうた』（新潮選書、一九八四・岩波現代文庫、二〇一二）か『柳は緑花は紅——古典歳時記』（小学館、一九八八・小学館ライブラリー、一九九三）かと迷いましたが、本書には、不思議な話がいくつも出て来るので、挙げることにしました。

「骸骨の話」では、『撰集抄』『長谷雄草紙』『還成楽物語』など、『遺骸や遺骨から人造人間を作る』という怪奇な話を取り挙げられます。人造人間が、親友もしくは恋人として作られるところが、哀れです。話は、江戸時代の怪異小説や演劇にまで及びます。

「虹の歌」では、『萬葉集』や西行や藤原定家など、『虹を詠んだ和歌・連歌』が取り上げられます。「虹」が「市（市場）」と結び付くことがある、というのは、実に神秘的です。

その他、「南殿の桜」では、紫宸殿（南殿）の桜を扱った和歌や

説話が検討され、「（旅）の発見」では、さまざまな紀行文が検討され、「女人遁世」では、遊女の出家や女の入水往生などが検討され……といった具合に、どの論文でも、あらゆる文献から用例が集められ、整理整頓され、明快に解説されています。これを博引旁証。

久保田淳や小西甚一や片桐洋一や佐伯梅友の論文は、青空のように広く澄み切っている、一方、益田勝実や佐竹昭広や阿部泰郎や亀井孝の論文は、ブラックホールのように茫漠（ぼうばく）としている……というのが、私が学生の頃に抱いたイメージです。後者には、言語化したいデモニーニッシュな思想性が感じられる、という意味です（だから私は前者のファンなのですが）。本書では、時折、「骸骨」「情念」「稚児」「乳水」などドロドロしたものが垣間見え、それが実にアツサリ説明されるので、『さすが久保田淳だな』と思うのです。

7 森正人『場の物語論』（若草書房、二〇一二）

「語る→聞く」という「物語の場」と、それを内在化した「場の物語」とを、徹底的に論究した本です。『このついで』『大鏡』『今鏡』『無名草子』『宇治拾遺物語』『道成寺縁起絵巻』などを対象に、語りの構造や作品の成立基盤を検証しています。

とかく、古典研究者というのは、ジャンルごと時代ごとに棲み分けをして没交渉になりがちなのですから、森正人は、平安く鎌

倉時代を俯瞰し、作り物語も歴史物語も説話集も包括的に考察して、頭が下がります。設定・構成の面から、『無名草子』を、『大鏡』『今鏡』『宝物集』を受け継ぐ作品だと捉えたところや、『宝物集』を、説話集ではなく「鏡もの」の系譜にある作品だと捉えたところなど、劃期的です。

『大鏡』は、翁たちが一七〇年の歴史を語る「場の物語」として知られていますが、本書では、『法華経』との重なり、『百鍊鏡』との繋がりなどが論じられています。

『宇治拾遺物語』は、不可解な序文が付いていて謎の多い物語ですが、本書では、複数の語り手が順に話をして皆がそれを聴く「巡の物語」だと把握しています。

近現代文学における「語り論」(narratology)が想起されるでしょうか。映画やアニメにおける「額縁（枠）物語」が想起されるでしょうか。しかし、日本古典の場合、「語りの場」は、作品の内にも外にも存在していて、文学の発生と関係していて、仏教も関係していて、作品間に影響関係まである、というところが、複雑精妙だと思います。

さらに、本書では、物語と「絵」の関係についても検討されます。『道成寺縁起絵巻』においては、絵と、登場人物のセリフと、地の文（詞章）と、絵解き（絵の説明文）と、そして、絵巻を見せて語る僧と、集まった聴衆が存在するわけですが、私は、その関係性

を図解したい！（イラストで説明したい！）”という欲望を抑えられませんか。

付記…日本古典では、しばしば、絵と、物語・和歌とが、連動し重合します。以下の本は、その実例が展示されたときの図録です。

『歌を描く絵を詠む——和歌と日本美術』（サントリー美術館、二〇〇四）

屏風、絵巻、短冊、扇、着物、食器など、さまざまな形をとる「絵と和歌」が、多数、カラーで掲載され、詳しい解説が付されています。

なお、「絵と物語」については、以下の入門書を推薦したいと思います。

上野友愛&岡本麻美『かわいい絵巻』（東京美術、二〇一五）

こんなにキュートでチャームングで、学問的にしつかりしていて、読んでいて笑みがこぼれてしまう概説書が、他にあるかしら？ 私もこんな本を書きたい。

8 工藤重矩『平安朝文学と儒教の文学観——源氏物語を

読む意義を求めて』（笠間書院、二〇一四）

『古今和歌集』『大和物語』『源氏物語』から本居宣長までを対象に、日本人の文学観を剔抉し闡明した本です。「儒教の文学観では、人格形成や政治に役立たない文章には社会的価値はない」と考える、知識人はそれを刷り込まれている、では、どうしたら和歌や物語に存在意義があると言えるのか？……そんな葛藤の歴史を辿っています。

一章・二章では、平安～南北朝時代の知識人たちが、和歌や物語

の意義を主張するためにどのようなロジックを用いたかが、考察されます。例えば、『古今和歌集』序は、『漢詩には教誡的政治的価値がある、和歌は漢詩と同じ役割を果たしている、ゆえに和歌にも教誡的政治的価値がある』という論法をとった、と言います。

では、一方、物語の意義は、どのように主張できるでしょうか？ 特に『源氏物語』は、儒教からも仏教からも白眼視される「虚言・妄語」なのですから。不義密通を描く「好色邪姪」の書なのですから。

三章では、『源氏物語』「螢」巻に出て来る「物語論義」が分析されます。光源氏の発言は、『物語（そらごと）』は、史書（まこと）と趣旨を同じくするものであり、ゆえに物語も有用な存在である」という論法をとっている、と読み説かれます。しかも、その論法は、南北朝～室町時代の注釈書にも引き継がれてゆくようです。

五章・六章・七章・九章では、南北朝～江戸時代、『源氏物語』を評価しようとする知識人たちが、儒教や仏教の価値観と折り合いを付けるためにどういう戦略をとったか、という問題が検討されます。『河海抄』が、『源氏物語』（そらごと）を注釈するときやたと史実（まこと）を並べていたのには、理由があったのですね。

また、莊子の「寓言」の説が深く関わっていたという指摘にも、蒙を啓かれました。『この物語は架空の話（そらごと）』だが、そこには作者の思想が託されている、ゆえに存在価値がある』という論

法になるわけです（現代にも生き残っている発想ですね）。

全九章、三百頁足らずの本ですが、実に濃厚です。文学を論じる人々の思考回路（詭弁ともとれるロジック）を、これほどまで緻密にクリアに説明した本が、他にあったでしょうか？ 日本の《文学思想史》が、この一冊に凝縮されています。

付記…本書の考察範囲は、主に平安～室町時代ですが、一方、江戸時代の文学観については、夙に、中村幸彦が多角的な研究をおこなっています。

『中村幸彦著述集（一）近世文芸思潮論』（中央公論社、一九八二）

伊藤仁斎の「文学は人情を追ふ」説をはじめ、芭蕉、近松、秋成、馬琴、蘆庵など、多ジャンルに亘る文芸思潮が、つぶさに検証されている本です。

9 おおたにまさお 大谷雅夫『歌と詩のあいだ——和漢比較文学論攷』

（岩波書店、二〇〇八）

日本文学と漢詩文との連関性を考究した本です（もちろん、日本文学の中の漢詩文にも目を向けています）。『萬葉集』『源氏物語』から秋成、蕪村、成島柳北までを対象に、これまで正しく理解されていなかった表現を、実証的に読み解いてゆきます。

例えば、「六 道をうづむ花」では、『狭衣物語』中の意味不明の一節「かうりたまかへつてあとなるはふかし」が、『本朝麗藻』の「行履珠帰つて跡半ば深し」であると指摘されます。ビックリ仰天しました。さらに、そこから、『客人が去つた後、その道（靴跡）に、

花や雪が積もる」という和歌が流行したことへと話が展開してゆきます。

例えば、「三『蜻蛉日記』と漢文学」では、『蜻蛉日記』中の意味不明の一節「散るかつはとよ」が、李白の「落花散り且つは跳ぶ」であるとは指摘されます。二十年ほど前までは、「李白・杜甫は、平安文学（特に女流文学）には全く影響を与えていない」と言われていたと思うのですが、そういう俗説は霧消したわけですね。

例えば、「六『青頭巾の問い』」では、『雨月物語』の「青頭巾」が解説されます。快庵禪師が人食いの住持に向かつて放った「永夜清宵何所為」は、どういう意味の句なのか？ 何をどう問いかけた言葉なのか？ 人食いの住持は、本当に悟りに達したのか？ ……という、物語の根幹に関わる問題が、丁寧に論じられています。

その他、『萬葉集』の「酒坏」や「鏡」、『源氏物語』の「扇」や「泣く音」など、よく目にしていたはずなのによくわかっていなかった事象が、手堅い考証を経て、きれいに解き明かされてゆきます。多くの用例が博搜され、当時の語法が調査されて、これまでの通説・誤解が、次々と正されてゆくのです。実に鮮やか！

大谷雅夫の論文はいつも、ある小さな文辞を正確に読もうとするところからスタートします。その考証があつてはじめて、視野を、作品全体へ、作者へ、時代へと広げてゆけるわけでしょう。私は、「注釈こそ文学研究の要なのだ」と感得せずにはいられません。

10 小田勝『実例詳解 古典文法総覧』（和泉書院、二〇一五）

英文法をより深く勉強したいときには、『徹底例解 ロイヤル英文法』（旺文社）や『現代英文法講義』（開拓社）があるのですけれども、日本の古典文法について詳しく知りたいと思つても、一冊で事足りる本は、見当たりません（かつては、松尾聡『古文解釈のための国文法入門 改訂増補』（研究社、一九七三）があつたのですが）。そんな中、本書が出ました。

日本の古典文法を体系的に詳説した本です。奈良く平安く鎌倉時代の文学から膨大な用例を蒐集しています。「文法の本が、必読書？」と訝しく思ふ方がいるかも知れませんが、私は（大げさに言う）、助動詞・助詞にこそ日本人の世界認識の方法が結晶化している」と考えているのです。

例えば、「第5章 時間表現」。「過去の助動詞「き」は、発話当日中の過去を表さない」という、重要な指摘がなされています（発話当日中の近過去には、完了の助動詞「つ」を使うそうです）。さらに、状態発生の「ぬ」、状態存続の「たり」、動作完了の「つ」、完了結果存続の「たり」などが、総合的に説明されています。「日本人の時間感覚」という、哲学的な問題に繋がりますね。「花散りぬ」は、「花が散ってしまった」ではなく、「花が散り始めた」と訳するのがよ

ということになるでしょうか。

本書は、高校の古典文法書とは、構成や着眼点を大きく異にしています。「複文」「係り受け」「準体句」という項があることからわかるように、日本語を「単語」単位ではなく、「句」「節」「文」の単位で把握しようとしているわけでしょう。その他、物語特有の「移り詞」「草子地」、和歌特有の「掛詞」「字余り」「字足らず」「句割れ」「句跨ぎ」なども検討されています。用例を見るだけでも、楽しい。

本書の面白さは、通常の文法事項だけでなく、極めて特殊なイレギュラーケースまで詳説されているところにあります。「そういう表現もあるのか」「そういう言い方はあり得ないんだな」ということが本当によくわかる、日本語の百科事典です。

付記：国語学者が古典を分析した論文は、文学研究者が気づかない事実や視点を示してくれるものが多く、勉強になります。今泉忠義、佐伯梅友、山口佳紀、野村剛史の論文も挙げたいところですが、ここでは、以下の本を推薦しておきます。

渡辺実『平安朝文章史』（東京大学出版会、一九八一・ちくま学芸文庫、二〇〇〇）

『蜻蛉日記』『枕草子』などを取り上げ、その文章・文体を分析することで、作者の物の見方や関心の向き方を解明してゆく、試論です。目次を見るとわかるのですが、各章各節のタイトルが、キャッチーで、うまい！

*

以上が、私の「日本古典研究ベスト10」です。他にも、『益田勝実の仕事』（全五巻、ちくま学芸文庫、二〇〇六）、佐竹昭広『古語雑談』（平凡社ライブラリー、二〇〇八）、目崎徳衛『出家遁世——超俗と俗の相剋』（中公新書、一九七六）、馬場あき子『式子内親王』（ちくま学芸文庫、一九九二）、松岡心平『宴の身体——バサラから世阿弥へ』（岩波現代文庫、二〇〇四）、奥田勲『連歌史——中世日本をつないだ歌と人びと』（勉誠出版、二〇一七）、小西甚一『俳句の世界——発生から現代まで』（講談社学術文庫、一九九五）、佐藤勝明『芭蕉はいつから芭蕉になったか』（NHK出版、二〇二二）、高田衛『春雨物語論』（岩波書店、二〇〇九）、小島憲之『国風暗黒時代の文学 補篇』（塙書房、二〇〇二）などを挙げようと考えていましたが、割愛しました。

本誌の「必読書」の企画をうかがったとき、私が想起したのは、雑誌『マリ・クレール』*marie claire japon*（中央公論社）です。この雑誌を安原顕が編集していた時代には、『文庫本の饗宴』（一九八七年九月）、《新・読書の快楽》（一九八八年八月）など、尖鋭的なブックガイドが掲載されていました。とつてもオシャレな誌面でした。愉楽に溢れていました。バブル期の「新教養主義」の空気が、まだ瀰漫（びまん）していたのでしょうか。私は、高校時代、そこで、若松賤子訳『小公子』を知り、風景景次郎『中世の文学伝統』（岩波文庫、一九八五）を知り、ナボコフ『ベンドシニスター』（加藤光也訳、サ

ンリオSF文庫、一九八六・みすず書房、二〇〇一）を知り、ブラン
シヨ『文学空間』（粟津則雄・出口裕弘訳、現代思潮社、一九六二・新
装版一九七六）を知り、蓮實重彦『表層批評宣言』（筑摩書房、
一九七九・ちくま文庫、一九八五）を知り、嵌まり込んで、そうして、
今に至ります。

もし、私のこの文章に騙されて古典の樹海に嵌まり込む学生がい
たら、何より嬉しく思います。もし、文学研究者のみなさんが、ブ
ログやツイッターに、「私のベスト10」を競って載せてくれたら、
ぜひ拝読したいと思います。